様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 ２０ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５２０３４９

研究課題名（和文）１８世紀フランス思想における言語論の研究―ルソーとその同時代の思想家を中心に―

研究課題名（英文）Study on language theories in eighteenth-century France : Rousseau and his contemporaries

研究代表者
増田　眞（Masada, Makoto）

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：１０２３８９０９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、18世紀フランスにおける言語論を取り上げ、ルソーを中心としてその思想的文脈に重点を置いて論じた。世紀中葉の思想家たちの多くが身振りや動物的な叫びを言語の起源と見なしたのに対して、ルソーは人間の声は、精神的・道徳的感情の発露であり、言語や音楽の起源であると主張した。また、同時代の思想家たちの多くが文法的な正確さや言語の純化による啓蒙をめざしていたのに対して、ルソーは道徳的な感情を伝える言語を求めた。このようなルソーの言語論は『エミール』などで展開されている彼の人間論と一致するものであり、本研究ではそのような理論的な関係を浮き彫りにした。

研究成果の概要（英文）：This study treats with language theories in eighteenth-century France and puts stress on the philosophical context of these theories, especially about Jean-Jacques Rousseau. While many of the contemporary thinkers considered gestures and animal screams as the origin of language, Rousseau argued that human voice is the expression of moral sentiment and is the origin of language and music. And while contemporary thinkers aimed at enlightening people by improving scientific language, Rousseau pursuit language likely to communicate moral sentiment.

研究分野：フランス文学

キーワード：ルソー　言語論　18世紀　音楽論

１．研究開始当初の背景

18 世紀フランス思想において、言語の問題が盛んに論じられていたことはよく知られている。また、その問題は 20 世紀の後半、ミシェル・フーコーの『言葉と物』やノーム・チョムスキーの『デカルト派言語学』などの著作によって注目を集めた。しかし、フーコーもチョムスキーも、自分の理論の一端として 18 世紀フランスの言語論を論じており、必ずしも当時の思想的文脈の中に言語論を位置づけることをめざしてはいないし、特にルソーの言語論を検討することを目的としているわけではない。18 世紀フランスの言語論それ自体の研究としてはたとえばウルリヒ・リケン Ulrich Ricken の著作（『啓蒙の世紀における文法と哲学—自然な秩序とフランス語の明晰さに関する議論』*Grammaire et philosophie au siècle des Lumières. Controverses sur l'ordre naturel et la clarté du français*, Publications de l'Université de Lille III, 1978）や『フランス啓蒙における言語学、人間学と哲学–言語論と思想–』（*Linguistics, Anthropology and Philosophy in the French Enlightenment. Language Theory and Ideology.* Routledge, 1994）などがあるが、この時代における言語論と思想のほかの側面の関連を扱った研究はまだ少ない。特にルソーについては、『言語起源論』の執筆時期が 20 世紀後半になってようやく確定されたという事情もあり、言語論の思想的位置づけについての総合的研究はまだないのが実情である。このような事態は、18 世紀の言語論が現代の諸科学の枠組みに収まりにくい領域であるという事情にもよる。この問題系は伝統的な哲学や思想史ではあまり扱われず、しかも言語学では言語学の前史のように周縁的な問題とされているので、正面から扱われることが少ない。特に 18 世紀の言語論では言語の起源が検討されることが多く、19 世紀末以降、言語学ではその問題は扱わないことになっているので、言語学の専門家からはいっそう等閑視されることになってしまっている。18 世紀フランスの言語論の属する領域はあえて言えば「言語思想史」ということになるが、それだけで１つの科学となるほど範囲の広い領域ではなく、研究の対象となりにくい。

２．研究の目的

本研究の主たる目的は、18 世紀フランスにおける言語論の諸相を浮き彫りにし、同時代の思想の諸側面の中に位置づけることにある。前述のように、18 世紀の言語論についてはその周辺の思想的文脈の研究がまだ不十分で、その方面を充実させる必要がある。特にルソーについては、その人間論や政治思想との関係を体系的に論じた文献がまだ少なく、その空隙を埋めることが急務であると思われる。そのように、この時代の言語論の研究は言語論だけでなく、思想家たちがどのような関心を持って言語について論じたのかという問題を通して、同時代の知のあり方を考察することになり、かくして言語論はより広汎な思想史的研究への有効な視座を与えてくれるはずである。

３．研究の方法

研究方法としては、関連文献をできるだけ読んで検討考察するという伝統的な方法を採用した。

18 世紀の言語論全体については、代表的な著作であるルソーの『言語起源論』*Essai sur l'origine des langues*（1782、死後刊行）やディドロの『ろうあ者書簡』*Lettre sur les sourds et muets*（1751）といった、代表的な思想家たちの関連作品のほか、思想家としては有名でなくとも、ド・ブロス De Brosses の『諸言語の機械的形成および語源学の物理的原理に関する論考』*Traité de la formation mécanique des langue et des principes physiques de l'étymologie*（1765）のようにこの時代の言語論を代表する著作を読んだほか、コンディヤック Condillac の『人間認識起原論』*Essai sur l'origine des connaissances humaines*（1747）ディドロとダランベール編の『百科全書』*Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers*（1751-1772）のように、その一部に言語に関する記述を含む著作をも考慮に入れた。そのほか、17 世紀から 18 世紀にかけての言語論やフランス語論に関する著作、たとえばアルノーとランスロの『一般的合理的文法』*Grammaire générale et raisonnée*（1660）（いわゆる『ポール・ロワイヤル文法』*Grammaire de Port-Royal*）やコルドモワ Cordemoy の『身体的言語論』*Discours physique de la parole*（1668）なども参照した。

ルソーに関しては、言語論と政治思想の関連を検討するため、政治的著作を精読し、特に言語論とルソーにおける法の観念の観念の関連性に重点を置いて考察した。また、ルソーにおける言語論と人間論の相互関係を考察するため、『言語起源論』と『エミール』の関連性をあらためて検討した。さらに、ルソーにおいて言語論は音楽論と不可分であるため、ルソーの音楽論上の著作（特に『音楽事典』*Dictionnaire de musique*, 1768）を精読し、音楽論と思想のほかの側面の関連性を考察した。

そのほか、思想的文脈の探究のために、18 世紀フランス以外でも言語論に関する文献をなるべく読んだ。そのいくつかの例として、プラトンの『クラテュロス』、ロック Locke の『人間知性論』*An Essay Concerning Human Understanding*（1690、仏訳 1700）やバークリ Berkeley の『人知原理論』*A Treatise concerning the Principles of Human Knowledge*（1710）や『ハイラスとフィロナスの三つの対話』*Three Dialogues between Hylas and Philonous*（1713）さらにヘルダーの『言語起源論』*Abhamdlung über den Ursprung der Sprache*（1772）が挙げ

られる。

４．研究成果

まず、全体として 18 世紀フランスの言語論は反デカルト主義的傾向が強く、感覚論の影響を強く受けている場合が多い。しかも後述するように言語論が既成の宗教的道徳的観念の批判に利用される場合が多いことはよく知られている。しかしその中でも立場の違いが見られ、特にルソーの場合は同時代の思想家たちとは言語に関しても異なる見解を表明することが多い。

18 世紀フランスにおいては、カトリック教会の伝統的な公式見解である言語神授説に対して、言語は人間の自然な欲求と能力によって発明され発展したという説を展開することが多くなっていく。そのような理論においては、言語の起源は動物的な叫びや身振りであり、それは身体的な欲求を表現し伝達するためのものであったとされることが多い。たとえばコンディヤックの『人間認識起原論』第二部で展開されている言語起原の再構成はそのようなものである。

それに対して、ルソーは『言語起源論』において、人間の言語の起源は身体的な欲求ではなく情念であると主張しているが、これはより人間同士の結びつきを可能にする精神的・道徳的な感情を社会や言語の起源および基盤として想定しようという立場である。その意味では、唯物論的傾向の強い同時代の思想家たちに対する反論を含む主張である。さらに、ルソーは原初的な言語は母音や韻律に富み音楽的なものであったこと、言語が文法的な正確さを獲得していくとともに、本来の音楽性を失っていったこと、を主張している。そのようなルソーの言語論は音楽論とも通底しており、ルソーによれば、音楽の起源は反響による和音ではなく、人間の声であり、歌であった。そのため、音楽の原理は和声（ハーモニー）という物理的なものではなく、旋律（メロディー）という人間の感情に根ざすものであるとされる。言い換えれば、同時代の思想家たちが音楽や原初的な叫びを人間の動物性の表現と見なし、人間性と動物性の隔たりを最小限に評価しようとすることが多かったのに対して、ルソーは人間性と動物性、身体性と精神性を峻別する論理で言語論や音楽論を展開しようとした。そのような理論は単なる音楽論にとどまらず、ルソーが自分の音楽論と政治思想の融合をめざして意識的に作り上げたものである。

以上がルソーと同時代の言語論の大枠であるが、今回の研究期間で発表できた論文ではより具体的に、以下のような成果が挙げられた。

論文①では、ルソーの宗教思想の体系的展開として知られている『エミール』第４編の中の「サヴォワ人助任司祭の信仰告白」を取り上げ、ルソーがその文書で、形式面ではコンディヤックの『動物論』*Traité des animaux*（1755）の一部を踏襲しつつ、人物同士の親密さによる感情の交流や説得をいかに重視しているかを明らかにした。

論文②では、特にルソーの『社会契約論』を取り上げ、その作品の未完の草稿である「ジュネーヴ草稿」で議論されている義務の相互性の問題がいかに受け継がれているか、それが『社会契約論』における法の観念や市民宗教の構想トドのように関連し、説得という契機とどのように関わっているかを論じた。

論文③では主として『エミール』の第２編を取り上げ、有名な「消極的教育」の理論や庭師との対話による「所有」の観念の習得の場面が子供による文節言語の習得という成長過程と深く関連づけられていることを示したのち、『エミール』における言語の問題が付随的なものではなく、自律的な主体を形成するために説得や誓約といった言語的な契機が重要であり、言語が中心的な問題の一つとなっていることを明らかにした。さらに、同時代の思想家たちが科学的知識の増大や言語の純化による啓蒙をめざしていたのに対して、ルソーは道徳的感情を伝える言語を言語のあるべき姿ととらえていることを示した。

論文④では『ダランベールの夢』*Le Rêve de d'Alembert* などのディドロの作品における言語についての記述をもとに、ディドロの言語論が、バークリによる唯我論や観念論をどのように乗り越えるかという問題と密接に関連していることを明らかにした。

論文⑤では、ルソーのリズム論を取り上げ、ルソーが時代に先んじてリズムを反復としてとらえていること、彼の音楽論では和声が人為的要素とさえているのに対してリズムが旋律とともに自然な要素ととらえられていることを示した。そして、ルソーの文学作品において、音の反復が人を夢想に誘う契機として繰り返し登場し、その点において音楽理論と文学的創造の融合の例が見られることを明らかにした。

論文⑥では前述の「サヴォワ人助任司祭の信仰告白」の後半部を取り上げ、そこでは言説の権威という問題が中心的に論じられていること、人間の言説が紛争のもとになるものとして不信の対象となっているのに対して。自然の光景や内面の声といった比喩的な言説が優位を与えられていること、キリスト自分の人格の優越性によって人々を説得したとされていることを明らかにした。ルソーにとって、人間の精神性や道徳性が言語の起源であったのと同様に、言説の権威の基盤も、言葉によって伝えられる道徳性でなければならなかった。

論文⑦ではルソーにおける歴史観とレトリックの関係を取り上げた。ルソーにとって人類の歴史の中では道徳的に高貴な時期、事件、人物などが手本として重要でありそれ以外は注目に値しない。ルソーのレトリックで

もやはり道徳的感情を高揚させるようなエピソードがそれにふさわしい文体で取り上げられている。言語論とは直接の関係はないが、ルソーのレトリックという点で言語論と深く結びついている。

論文⑧は論文⑤のフランス語版で、『フランス文学史雑誌』という伝統と権威のある専門誌に掲載された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　８　件）（論集に掲載されたものも含む）

①« Argumentation philosophique et mise en scène autobiographique chez Rousseau. La rhétorique de l'intimité dans la « Profession de foi du vicaire savoyard », dans Shojiro Kuwase, Makoto Masuda et Jean-Christophe Sampieri, *Les Destinataires du moi : altérités de l'autobiographie*, Éditions universitaires de Dijon, 2012, pp. 65-77.

②« Institutions et persuasion dans la pensée politique de Rousseau », *Revue d'Études Franco-Coréennes*, vol. 63, Société d'Études Franco-Coréennes, février 2013, pp. 269-291.

③« Forces et langage dans le livre II de l'*Émile* », *Recueil d'études sur l'*Encyclopédie *et les Lumières* （『『百科全書』・啓蒙研究論集』）n°2, mars 2013, pp. 205-222.

④「言語と他者　―ディドロと 18 世紀フランスの言語論―」『思想』第 1076 号、2013 年第 12 号、pp. 269-285.

⑤「リズムと夢想　―ルソーにおける音楽論と文学的創造―」、永見文雄、三浦信孝、川出良枝編『ルソーと近代　ルソーの回帰・ルソーへの回帰』風行社、2014、pp. 54-67.

⑥　« Nature humaine et autorité du discours dans la « Profession de foi du vicaire savoyard » », dans Blaise Bachofen, Bruno Bernardi, André Charrak et Florent Guénard (dir.), *Philosophie de Rousseau*, Classiques Garnier, 2014, pp. 471-484.

⑦ « Philosophie et rhétorique de l'histoire chez Jean-Jacques Rousseau », dans Noriko Taguchi (éd.), *Comment la fiction fait histoire. Emprunts, échanges, croisements.* Champion, 2015, pp. 39-51.

⑧ « Théorie du rythme et poétique de la rêverie chez Jean-Jacques Rousseau », *Revue d'Histoire littéraire de la France*, Mars 2016, 116e année, n°1, pp. 167-178.

〔学会発表〕（計　５　件）

① « Nature humaine et autorité du discours dans la « Profession de foi du vicaire savoyard », colloque international « Philosophie de Rousseau », École Normale Supérieure de Lyon, le 9 juin 2012.

② « Théorie du rythme et poétique de la rêverie chez J.-J. Rousseau », colloque international « Rousseau le moderne ? – Retour de Rousseau, retour à Rousseau », Tokyo, Maison franco-japonaise, le 16 septembre 2012 （国際シンポ「ルソーと近代」、東京、日仏会館、2012 年９月 16 日）

③ « Forces et langage dans le livre II de l'*Émile* », colloque franco-japonais sur les Lumières et sur l'*Encyclopédie*, Université Keio, le 30 septembre 2012.

④「声と記号　–ルソーの思想における言語論–」、日本フランス語フランス文学会 2012 年秋季大会ワークショップ「ルソーからの読解」（神戸大学、2012 年 10 月 21 日）

⑤« Institutions et persuasion dans la pensée politique de Rousseau », colloque 2012 de la Société d'Études franco- coréennes, « Le tricentenaire de la naissance de Rousseau — Homme, langage, littérature et pensées — », Université Ewha, le 10 novembre 2012.

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者

増田　眞　（MASUDA, Makoto　　）
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：10238909

(2)研究分担者

(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号：